

言語状況からみた Bangladesh の社会文化的構造 (トレンドレポート)

著者	レザウル カリム フォキル
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	231
ページ	31-35
発行年	2014-12
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://doi.org/10.20561/00039948

言語状況からみた Bangladesh の社会文化的構造

レザウル・カリム・フォキル

●初めに

本稿の目的は、言語状況を通じて、Bangladesh の社会文化的構成を明らかにすることである。

本稿に入る前に、簡単に Bangladesh は、どのような国かを紹介しておく。Bangladesh の面積は日本の面積の半分以下の四万七五七〇平方キロメートルで、一億六〇〇〇万人の人口を抱える国である。Bangladesh は南アジアの最も東端に位置し、東南アジアに隣接する国である。インドとイスラーム両方の文化の影響を受けつぎ、インド文化とイスラーム文化を混合した社会文化的特性を持っている。本稿で考察するのは、現代 Bangladesh の言語状況だが、Bangladesh はもともと南アジア（インド）の一角であり、現在の言語文化的な状況は、数百年にわたって行われた言語接触の過程を通じて形成されたものである。従って本論に入る前に、先ず

Bangladesh が独立した国家として誕生するまでの、この地域の言語状況とその経過と時代を追って記す。

● Bangladesh の言語状況の歴史の変遷

Bangladesh は、一九七一年に独立以来、唯一の公用語であり公共語であるベンガル語（または Bangladesh を持つ国として知られているが、今 Bangladesh として知られている地域は、何世紀にもわたって、多言語地域として存在していた。歴史の初期に、この国には、様々な言語話者コミュニティ、即ちオーストリア・アジア（ムンダ）系、チベット・ビルマ系、ドラビダ系の言語話者が各地域に分布していた。この地域に長い間続いていた多言語状況は、次の時代に二段階の外来民族の移住によって大きく変わった。最初は、紀元頃までにアーリア言語話

者コミュニティの移住があった。第二段としては、一〇世紀の初頭から英領インド期までに、中央アジア諸国から様々な民族即ちアフガン、アラビア、ペルシャ、トルコ系民族のイスラーム教徒が移住してきた（参考文献⑧⑨）。

アーリア人が話す言語は、インド・アーリア系言語（通称サンスクリット語の一種）だったが、その方言の一種であるプラークリット語（自然に形成された言語の意味）が、先住民族の各言語と接触を行うようになった。移住してきたインド・アーリア系民族言語が支配的となり、先住民族の言語と接触が行われた結果、そのプラークリット語が編成され、先ずアブランシヤ語（崩れた・下品な言語）が形成された。それはさらに変遷してインド諸語の一種としてベンガル語が生まれた。この変遷の過程のなかで先住民族の言語のほとんどは姿を消した（参考文献⑩）。

ベンガル語の変遷は、さらにイスラーム教徒による征服の時代から英領インド時代まで続いた。イスラーム教徒による征服とともに、幾重にもわたって、中央アジア各地から様々な言語話者がこの地域に移住してきた。中世において

では、それまで南アジア亜大陸の宗教的且つ学問的な言語であったサンスクリット語の代わりに、ペルシア語が公用語として導入された。長い間このような社会言語的な変革のなかで言語接触が頻繁に行われた結果、原始ベンガル語が形成された。現代ベンガル語の変遷は、次のとおりである。

サンスクリット語 ↓ 方言サンスクリット語 ↓ プラークリット語 ↓ アブランシヤ語 ↓ 原始ベンガル語 ↓ 現代ベンガル語

イスラーム教徒による支配期には、中央アジアからアラビア語、アフガン語、ペルシア語やトルコ語のような様々な言語話者とともに、南アジア他の地域からも様々な言語即ちオリヤー語、ボジュプリー語、マルワリー語、カシミール語の話者が移住してきた。その結果として、ベンガル語の変遷課程の各段階に地域毎に様々な多言語状況が生まれた。英領インド期にも、その移住の流れは止まらず、南アジアの各地域からオリヤー語、ボジュプリー語、マルワリー語、カシミール語、ネパール語、テルグ語などの話者が移住してきた。そして多言語状況がさらに拡大し

表1 バングラデシュで話されている各語族に属する言語名とその割合 [引用: Lewis (eds.) (2009)]

語族名	語派名	言語名	言語話者の割合
インド・アーリア語族	ベンガル語	ベンガル語とその方言	98.74%
	その他のインド諸言語	ウルドゥー語、ビハール語、ロヒンギャ語	0.33%
	先住民の言語	チャクマ語、トンチョンギャ語、ハジヨング語、ビシュヌプリー語	0.25%
シナ・チベット語族	ボド諸言語	コッチ語、ガロ語、トリブラ(コクボロク)語、カチャリ語、ウスイ語	0.53%
	ビルマ諸語	ボム語、キャング語、クーミ語、クーキ語、ルシャイ語、パンクーア語、アラカン(マルマ)語、チャク語、メイテイ(モニプリ)語、ミキル語、ムロ語	
オーストロ・アジア語族		カーシ語、コダ語、プナル語、サンターリー語、ワル・ジャインティア語	0.12%
ドラビダ語族		クルック語、サウリア・パハリア語	0.03%

(出所) 著者作成(参考文献⑥)。

た。当時の英領インド政権は、一八三五年に公用語としてペルシャ語の代わりに英語を導入した。この地域の多言語的状況は、一九四七年に英領インドからの分離独立によるパキスタンの誕生後、東パキスタン時代に更に変わった。なぜなら、ヒンドゥー教徒の多くはインドに移住し、インドから多くのイスラーム教徒と西パキスタンからの移民が流入し、人口構成を変えたからである。

●現在の言語状況

ベンガル語話者は、人口(一億六〇〇〇万人)の九九%を占めているが、残り1%の少数民族が話す言語は何と三〇もある。その三〇の言語は、四つの異なる語族に属する(参考文献②)。その四つの語族は、(1)オーストロ・アジア語族(例、サンターリー語、カーシ語)、(2)シナ・チベット語族(例、ガロ語、コクボロク語、マルマ語)、(3)インド・アーリア語族(例、チャクマ語、ハジヨング

語、トンチョンギャ語、ビハール語)、(4)ドラビダ語族(例、クルック語)である。表1は、語族とそれに属する言語名、およびその話者人口を示している。ここからバングラデシュで話されている言語の全体像が浮かび上がる。上記の表1からも明らかのように、単一言語主義を超えた一定程度の多言語状況が今のバングラデシュに存在している。

何世紀にもわたって保たれてきたこの多言語状況は、新しい均質な国家として、一九七一年にバングラデシュが生まれたことで、終焉を迎えた。今のバングラデシュは、ベンガル語話者の国として知られている。それにもかかわらず、(1)バングラデシュの地域ごとの方言分布、(2)先住民の言語分布、(3)社会的な諸局面における外国語使用の傾向、という三つの場面を視野に入れて言語状況をみると、バングラデシュにはある程度の多言語状況が存在していることが伺える。

●場面一：ベンガル語とその地域言語変種の分布

標準的ベンガル語は、一九世紀に英領インドの首都であったカルカッタを舞台として、当時の知識的権威者(ノーベル賞を受賞したタゴールを含む)によって数百年間にわたって形成された言語を基盤に標準化したものであるが、その地方諸言語変種が、今なお存在している。インドから分離独立後、ウルドゥー語に対するベンガル語の地位を巡って争いはあったが、後に一九五六年に公用語としての認定を得ることができた。さらに、

パキスタンからバングラデシュが独立し、史上初めてベンガル語が国語と公用語になった。ベンガル語は、バングラデシュの唯一の国語かつ公用語となったが、その標準的なベンガル語以外にも、様々な方言が存在している。先にも述べたように一八世紀まで続いたベンガル語の形成期間中に、インド・アーリア系言語(アブランシヤ語)に、オーストロ・アジア系とチベット・ビルマ系、それにドラビダ系の言語の影響によって、方言別に言語変種が生まれた。

バングラデシュ文化調査(参考文献⑤)によると現時点では、一六という少なからぬ数の地域(ボリシャル、ボグラ、チッタゴン、コミッラ、ダッカ、ディナジプール、フォリドプール、ジョソール、クルナ、クシュティア、マイメンシン、ノアカリ、パブナ、ラジシャヒ、ロングプールとシレット)に方言が存在している。そのなかで、シレットとチッタゴン地方の方言は標準語から著しく乖離している。一六地域の方言のなかで、特にチッタゴン方言は、他の地域の人々にとってほとんど理解不可能である。ここで述べているように、ベン

ガル語の多くの方言が存在しており、公式的なコミュニケーションの手段としての標準ベンガル語の使用と、日常的なコミュニケーションの手段としての方言ベンガル語の使用があることから、バングラデシュではある意味ではダイグロシア⁽¹⁾的な言語状況が存在しているといえるだろう。更にバングラデシュの各地方から人が集まるダッカ、チッタゴンとシレットのような大都市では、異なるベンガル語方言話者の言語使用によるダイグロシア的な言語状況もみられる。地域から大都市に移り住む人々は、コミュニケーションの際に、それぞれの独自の方言を使うが、困ることなくお互いに会話をを行うことができる。

ベンガル人が話すこのような地方方言以外にも、モンゴロイド起源の先住民によって話される特定の言語、即ちチャクマ語、トンチヨンギャ語、ハジョング語、ビシユヌプリー語などがあるが、それらは何れもインド・アーリア語族に属するもので、ベンガル語の方言に近い。これら特定の言語は、モンゴロイド起源の少数民族がかつて話していたチベット・ビルマ系の言語が、地方ベンガル語の影

響を受け変遷したものである。これらの言語は、先祖代々の語族との所属を失い、今はインド・ヨーロッパ語族家族（参考文献⑥）のインド語群に属するようになった。

●場面二：原住民言語の分布

バングラデシュの幾つかの地方では、三〇を超える先住民の言語コミュニティが居住しており、そのためにその地域では多言語主義的な状況が存在する（参考文献⑦）。これらの地域には、チッタゴン丘陵地帯、インドに隣接するシレットとマイメンシンの一部の地区やミャンマーに隣接するチッタゴンの地区が含まれており、モザイク模様のような言語分布がみられる。このような言語状況は国内の幾つかの地域に存在する。サントारीー語話者は、内陸のラジシャヒとディナジプール地区に集中し、ラカーイン（モグ）語話者はボルグナとポトウアカリ地区に集中しており、そこにはバイリンガリズムの言語状況が保たれている。

バングラデシュに居住する少数民族の言語話者の地域別分布以下のとおりである（参考文献①）。

(1) チッタゴン丘陵地帯…この地域

はインドとミャンマーとの国境沿いのバングラデシュ東南地区である。その人口は約一五〇万人で、その約五〇%を占めるのは、マルマ、トリプラ（コクボロク）、チヤク、パンクワ、ムル、ムルング、ボム、ルシャイ、キャングとクミミといったチベット・ビルマ系言語話者と、チャクマとトンチヨンギャ語といったインド・アーリア系言語話者である。残りの約五〇%の住民はベンガル人のベンガル語話者である。この地域では、チベット・ビルマ系の先住民の殆どは、第二言語としてベンガル語を身につけバイリンガルになり、その人数は増えつつある（参考文献③）。

(2) インド国境沿いのシレットの地域…インドの国境沿いに接するシレットの地区の一部では、多言語状況が存在している。この地域では、カーシ、ビシユヌプリーヤ、ガロ、ハジョング、メイテイ（モノプリ）、プナル、ワル・ジャインティアとサドリ・オラーオンといった少数民族が三方所に集中していて多言語状況を保っている。

(3) インド国境沿いのマイメンシン地区…インドのメガラヤ州に接するマイメンシン地域の幾つかの地

区では、バイリンガル状況が存在している。その地区では、アトング（ボードー）、ガロ、コッチ、メガム（ボードー）、ハジョングといった少数民族が集中し、バイリンガル状況が保たれている。さらに、マイメンシンの内部地域の何方所かにもガロ少数民族（総称は平地ガロ）が居住している。

(4) ミャンマー国境沿いのチッタゴン地域…その一部の地域では、マルマ、ラカーヤン、ロヒンギャなどの言語話者が多く居住している。多言語状況となっている。

(5) ラジシャヒとディナジプール地域…ラジシャヒとディナジプールというバングラデシュ内陸地域では、サントारीー（オーストロ・アジア系言語）とクルクス（バングラデシュで話される唯一のドラビダ系言語）の言語コミュニティが同居しており、バイリンガル言語状況が保たれている。先住民の言語コミュニティの間ではお互いの言語が通じないため、彼らはリンガ・フランカとなるベンガル語でコミュニケーションを取り合う。これらの人々は、それゆえ、第二言語となるベンガル語を自然に習得することで、程度が異なるもののバイリンガルになりつつあ

る。ここで言及すべきこととして、これらの言語コミュニティは、昔ヒンドゥー教や仏教に改宗した。その結果、彼らの言語は、何世紀にもわたってインド宗教の説教言語、すなわちサンスクリット語やパーリ語と定期的に接触してきた。また、彼らにとつてリンガ・フランカとなるベンガル語とも現在接触が行われている。こうしてインド・アーリア語の継続的な影響を受け、受容言語のいくつか、例えばチャクマ語とハジヨング語では、言語構造の全てのレベル（音韻、形態、統語言語）において影響を受けた結果、祖先語族であるシナ・チベット語族への帰属が失われた（参考文献⑥）。

●場面三：様々な社会的環境（宗教と教育）での多国語の使用の動向

バングラデシュの人々は一般的に、標準的なベンガル語とその地域別方言のどれかを使用しているが、これらの人々は、教育、宗教、あるいは公式的場面といった社会的環境で、必要に応じて母語以外の言語を使用する場合がある。例えば教育目的で英語やウルドゥー語／アラビア語を使用し、宗教的

な目的でアラビア語、サンスクリット語やパーリ語の言語のいずれかを使用する。こうした様々な社会的な場面で第二言語としてこれらの言語のいずれかを使用するが、言語能力のレベルは異なる。バングラデシュの殆どの人々は、教育の場面では一般的にベンガル語を使うが、なかには英語かウルドゥー語／アラビア語のような外国語を媒介して教育を受ける人も僅かに存在する。エリート社会の人々は、英語を媒介して西洋の教育を受けることを好む。一方では、マドラサ⁽²⁾と呼ばれるイスラーム教徒教育機関が存在し、ウルドゥー語とアラビア語の混合媒介を通じてイスラーム教の価値観に基づいて教育を受ける人々もいる。このように外国語を媒体として特別な教育を受けた人々は、公的な社会的場面では母国語のベンガル語を使用するが、教育の場では英語かウルドゥー語とアラビア語を使用する。英語やウルドゥー語／アラビア語を媒介して教育を受けた人々のうち、一部はそれらの言語について一定程度の能力を身に付けることができる。そのため、これらの人々は、多くの場合、教育の場でも、時に英語かウルドゥー

ー語／アラビア語を使い、また時に話の内容によってはベンガル語に切り替える。バングラデシュの人々の様々な教育現場での使用言語は、以下の表2で示す。

宗教的な場面では、バングラデシュの人々は、彼らの宗教的儀式や作法のためにアラビア語、サンスクリット語、パーリ語の三言語のいずれかを使用している。バングラデシュの人口のほとんどがイスラーム教徒であるため、宗教的な場面では儀式や作法の言語としてアラビア語は広く使われている。

英語を媒介して教育を受けた一部の人々には、英語をかなり自由に扱うことができる者もいる。彼らのうち一部は、彼らなりのサブカルチャーを育み、教育的且つ公式的な場面では、口頭でのコミュニケーションの場合、ベンガル語ではなく英語を使用する。

表2 教育の場における言語使用

	教育の種類	教育の性質	媒介語	人々の社会的階層	
01.	上流階級の人々の教育	質の高い教育と考えられる	GCE ¹ シラバス	英語	社会経済的な地位を有するエリートおよびエリート社会の人々
			NCTB ² シラバス	英語とベンガル語	バングラデシュの様々な都市に住む中流階級の人々
02.	宗教教育	イスラーム教育	コウミ・マドラサ	ウルドゥー語とアラビア語	イスラーム教の基本的な価値を持つイスラーム教徒の一部
			アリア・マドラサ	ベンガル語とアラビア語	主流的教育への傾倒はあるが、イスラーム的価値も維持するイスラーム教徒の一部
		ヒンドゥー宗教教育		サンスクリット語	宗教的な儀式や儀式のためのサンスクリット語を必要とする、少数のヒンドゥー教司祭
	仏教教育		パーリ語	ベンガル人と先住民族の両方を含む少数の仏教徒司祭	
03.	一般庶民向けの教育	ナショナルカリキュラムと教科書委員会に基づく教育 (NCTB)	ベンガル語	ほぼ全農村人口と都市人口の下流階級の人々	

(注) 1) General Certificate of Education.
2) National Curriculum and Textbook Board (ナショナルカリキュラムと教科書委員会).
(出所) 表1と同じ。

●結論

以上、本稿では前記三つの言語状況の場面、(1)バングラデシュの地域ごとの方言分布、(2)先住民族の言語分布、(3)社会的な状況ごとの外国語使用の傾向を議論することで、言語というレンズを通じてバングラデシュの社会文化的な構造を解明した。

(Razaul Karim Faquire / ダッカ
大学教授)

にあり、内部における具体的な
教授内容についても不明な点が
多い。

⑨ Faquire, Razaul Karim. "Effects
of Language Contact on Some
Tibeto-Burman Languages of
Bangladesh: Issues of Language
Endangerment." The 16th World
Congress of the International
Union of Anthropological and
Ethnological Sciences. Yunnan
University, Kunming, China.
July 2009. pp. 27-31.

《注》

(1) ダイグロシヤ (英: diglossia)

とは、文語と口語によって文末
表現が違う言語変種のこと。日
本語では丁寧形 (英語を話し
ます。) に対して普通系 (日本
語を話す) のような区別に相当
するものである。

《参考文献》

① Shahidullah, Mohammad.

Bangala Bhashar Iibritto (ベン
ガル語の過去の物語). Dhaka:
Mowla Brothers. 1965. Mowla
Edition, 1998.

② Breton, Roland, J. L. Atlas

of the Languages and Ethnic
Communities of South Asia.
London: Sage Publications.
1997.

③ Chakma, Sugoto. Parbottyo

Chottogramer Bhasha O
Upobasha Srenikoron (チッタ
ゴーン脈地帯の言語と方言
の類型). An Unpublished M.
Phil Dissertation submitted at
the Dhaka University. 2000.

④ Chatterji, Suniti Kumar.

Origin and Development of
the Bangla Language. Kolkata:
Rupa & Co. 1926 (reprinted in
1993).

⑤ Cultural Survey of Bangladesh

Series: Language and Litera-
ture. Dhaka: Asiatic Society of
Bangladesh. 2007.

⑦ [http://en.wikipedia.org/wiki/
Demographics_of_Bangladesh](http://en.wikipedia.org/wiki/Demographics_of_Bangladesh).

⑧ Lewis, M. Paul eds. *Ethno-
logue: Languages of the World*.
16th edition. Dallas: SIL Inter-
national Online version: [http://
www.ethnologue.com](http://www.ethnologue.com) (Ac-
cessed on August 08, 2011).

⑨ Majumdar, Ramesh Chandra.

*The History of Bengal. Volume
I: Hindu Period*. Dhaka: The
University of Dacca. 1943.

⑩ Rahim, Muhammed Abdur.

*Social and Cultural History of
Bengal* Vol.1. Karachi: Pakistan
Historical Society. 1963.

⑪ Anisuzzaman. Bangladeshe

Bhasha Poristhiti (ベンガル
ハシの言語状況). *Asiatic Society
of Bangladesh*. Vol. 16, June,
2008. pp. 2-10.

年ほど教えられる以外は、ほと
んどがアラビア語、ウルドゥ
ー語、ペルシヤ語のテキスト
を用いたイスラーム教育を施
すロウミ・マドラス (Quawmi
Madrasa) あるいはカリジ・マ
ドラス (Kharezi Madrasa) と
よばれるものである。このロウ
ミ・マドラスは、政府の管轄外